

他国に 結婚に行きて

大刀が緒も いまだ解かねば さ夜そ明けにける

作者未詳(巻十二・二九〇六)

けて終わります。

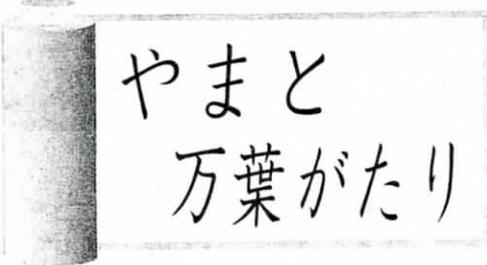
『万葉集』で「大刀」は「剣大刀」などの枕詞として用いられることが多く、恋の歌に「大刀」そのものが詠まれることは他にありません。今回の歌は、八千矛神の歌を利用したものといえます。

なるほど、女性の家に入れてもらえなかった時の男性にびったりの歌ですね。

(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)

歌に「結婚」の二文字が見えますね。『万葉集』に「結婚」と書かれた歌は3例ありま。今回の「結婚」に行く」という例のほか、「結婚に来る」という例、そして二人の男性が一人の女性に「結婚する」という例です。どうやら今の「結婚」とは意味が違いそうで

すね。『万葉集』の「結婚」は「よばふ」とよみ、男性が女性に求婚することを表します。「呼ぶ」に継続の「ふ」が付いた形で、元来は呼び続けるという意味です。この歌の男性は、わざわざ他の国まで求婚に行き、邪魔な大刀



の紐すら解かないまま、夜が明けてしまっ。たよ、と嘆いています。女性に思いを受け入れてもらえなかった男性の歌ですが、実は神話の影響があると考えられています。

『古事記』上巻に40句にも及ぶ長い歌があります。八千矛神(大國主神の別名)は「遠

遠し高志の国(北陸)に美しく賢い女性(沼河比売)がいると聞いて、出雲から「さ呼ばひに」出かけます。そして「大刀が緒もいまだ解かず」、大刀の紐も解かず上着も身

に着けたまま、乙女の寝ている扉を押し開けて、引いたりして立って、うちに、鳥が鳴く朝になつてしまひました。この腹立たしい鳥の歌ですね。

【訳】他郷へ遠く求婚に来て太刀の緒もまだ解かないのに、もう夜は明けてしまったよ。

真珠たまつく 越をちの菅原すがはら

われ刈らず 人の刈らまく 惜をしき菅原

作者未詳(巻七・一三四一)

「惜ら菅原」が「惜ら清し女」を意味しています。菅原の「菅」は「清」と発音が同じで、清らかな女性が想像されたのでしよう。

冒頭の解説の続きで「どつき易さが利点」とフォローされている巻七。中でも譬喩歌は

真意を想像しながら読むと楽しめるのではないでしようか。

(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)

『万葉集』全20巻は巻によって個性があります。巻七はというと「まとまりの悪さの点で類がない」、『万葉集の吹溜り、皺寄せの先取りと言われかねない』(小学館『新編日本古典文学全集』)と解説されます。なんとも歯に衣着せぬ印象的な解説ですね。

この巻には雑歌・譬喩歌・挽歌という三つのジャンルが収められています。今回の歌は譬喩歌に入っており、何かに譬えて恋心を詠むものです。そのまま読むと恋の歌には見えませんが、これは、女性を菅原に譬えた、男性の恋の歌です。「真珠つく」は枕詞

やまと
万葉がたり

で「玉を貫くのは「緒」なので同じ発音をもつ「ヲチ」という地名にかかっています。その越にある菅原(女性)を手に入れたのに、他の男性が手に入れるのが惜しいよ、という切ない歌です。

女性を菅に譬える歌は『万葉集』に複数ありますが、この譬喩の

方法は『古事記』下巻の歌に明らかです。

「八田の一本菅は子持たず 立ち荒れるのたろう

「八田の一本菅は子持たず 立ちか荒れなむ 惜ら菅原 言をこそ 菅原と言はめ

「八田女と別れる時の歌で、

仁徳天皇が八田若郎

をこそ 菅原と言はめ

「八田女と別れる時の歌で、

【訳】真珠をつけるヲチの菅原よ。私が刈らず、他人が刈るだろうことの残念な菅原よ。